

〈新刊紹介〉

森田武著／索引 川口敦子編

『日葡辞書提要《付索引》』

本書は、1993年に初版が刊行された森田武著『日葡辞書提要』と、その本文中に引用されている「日葡辞書」のローマ字書き日本語に対する川口敦子編による『『日葡辞書提要』索引』とをあわせて、2冊組として復刊したものである。『日葡辞書提要』は、キリタン版の日本語辞書（長崎版の日葡辞書）に国語学的見地から調査研究を加え、その結果を記述したものである。このたび新たに付された索引は、『日葡辞書提要』でどのような語が取り上げられているかを概観することを主目的として作成されたもので、本文で話題の対象となっている語およびその語を含む見出し語を採り、出典の種類を明示しながら、現行のアルファベット順に配置している。

(本体・索引セット 2012年10月15日発行 清文堂出版刊 A5判横組み 648頁 17,000円+税 ISBN 978-4-7924-1423-8)

(川口敦子編『『日葡辞書提要』索引』 2012年10月15日発行 清文堂出版刊 A5判横組み 56頁 1,000円+税 ISBN 978-4-7924-1421-4)

月本雅幸解題

『キリタン版 日葡辞書 カラー影印版』

本書は、イエズス会宣教師たちと日本人協力者により編纂され、1603年に本編、翌年1604年に補遺編が長崎学林によって刊行された『日葡辞書』のカラー影印版である。Oxford University Bodleian Library 所蔵本を底本として、原色・原寸大に複製している。

『日葡辞書』は、32,293語の日本語をアルファベット順に配列しポルトガル語の訳語・説明を付した中世口語研究に必携の書。日本語の口語を中心に文書語・歌語・仏教語・女房詞・方言・卑語などを収録。語義のほか、豊富な用例をあげて用法を示したり、漢語の訓釈や同義語や関連語なども示している。

(2013年1月20日発行 勉誠出版刊 四六判横組み 848頁 100,000円+税 ISBN 978-4-585-20014-7)

木下りか著

『認識的モダリティと推論』

本書は、認識的モダリティ形式について、推論という枠組みから体系的意味記述を行った書である。確実な認識が及ばないという意味での非現実世界の認識には推論が介在するという視点から、「ようだ、らしい」などの認識的モダリティ形式の意味を分析

する。人間の認識や思考を支える演繹・帰納等の推論の型、類似性・隣接性等の関係性が、認識的モダリティ形式の意味に塗り込まれているさまが詳述される。

本書は、ひつじ研究叢書言語編第107巻として刊行された。

「第1章 はじめに」、 「第2章 認識的モダリティ分析の視点」、 「第3章 証拠に基づく認識」、 「第4章 「広義因果関係」をさかのぼる二つの推論」、 「第5章 「ようだ」の多義的な意味の広がり」とカテゴリー帰属認識」、 「第6章 隣接関係を用いたメトニミー的推論」、 「第7章 日常言語の推論における暗黙の前提」、 「第8章 根拠の非明示性と推論の方向性」、 「第9章 非現実世界の蓋然の特徴と主観性」、 「第10章 おわりに」。

(2013年2月14日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 288頁 7,600円+税 ISBN 978-4-89476-630-3)

山橋幸子著

『品詞論再考——名詞と動詞の区別への疑問——』

本書は、名詞と動詞を基本的区分とした品詞論の再考と、現代日本語における語類の解明に取り組む書である。

名詞と動詞は言語普遍的必須の区別として一般に受け入れられている。本書はこの区別の起源とされる古代ギリシャの哲学者の原理に遡って品詞論を再考。従来とは異なる見地から日本語における単語の規定をし、語類体系を提示する。

本書は、博士論文（アリゾナ大学大学院言語学研究所、1988年）をはじめとした著者の一連の論文を基に、加筆修正をしたものである。平成24年度札幌大学学術図書出版助成制度の支援を受け、ひつじ研究叢書言語編第106巻として刊行された。

「はじめに」、 「第1章 序論」、 「第2章 古典期ギリシャの哲学者の品詞論」、 「第3章 「転成分析」 「(連用形) 転成名詞」再考」、 「第4章 単語とは」、 「第5章 日本語（和語）の語類 形式上の分類」、 「第6章 日本語（和語）の語類と意味との相関関係」。

(2013年2月27日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 160頁 8,200円+税 ISBN 978-4-89476-629-7)

石井正彦・孫栄爽著

『マルチメディア・コーパス言語学——テレビ放送の計量的表現行動研究——』

本書は、テレビ放送のマルチメディア・コーパスを使って、話し手の言語行動における言語表現と非言語表現との関係や、言語行動と映像との関係を、計量的な調査によって明らかにしようとした書である。

話し手の発話を文字化したテキストと、その発話場面の映像とを同期させ、文字列検索と同時にその発話時の映像・音声をも参照できるようにした「マルチメディア・コーパス」は、現実の言語行動データを大量に集め、計量的に分析する言語行動の記述研究に有用である。その実例として、4～6章の研究を示す。

「第1章 モノメディア・コーパスによる言語使用の研究」、 「第2章 マルチメディア・

コーパス言語学の試み」,「第3章 マルチメディア・コーパスの構築」,「第4章 擬音語・擬態語と身振り」,「第5章 終助詞ネと視線」,「第6章 指示詞と指差し」,「第7章 談話行動の映像化」。

(2013年2月28日発行 大阪大学出版会刊 A5判横組み 204頁 3,400円+税 ISBN 978-4-87259-420-1)

朴真完著

『朝鮮資料』による中・近世語の再現』

本書は、ハングル音注やハングル対訳を豊富に載せる、14世紀から18世紀後半にかけての朝鮮資料を対象として、日朝語の歴史的变化を観察する書である。

両語に通じる著者が、原語と対訳語の対照を行い、双方向の影響関係に着目し、歴史的な事柄、文化背景にまで踏み込んで両言語の歴史的な分析を行う。

「第1部 朝鮮資料研究の過去と現在」は「第1章 序論」,「第2章 中・近世語資料」,「第3章 言語干渉」。「第2部 朝鮮資料研究の展望」は「第4章 言語観察」,「第5章 言語接触」,「第6章 言語学習」,「第7章 結論と課題」。「〈付録〉主要資料の所蔵先と影印の状況・『惜陰談』影印」。

(2013年2月28日発行 臨川書店刊 A5判縦組み 464頁 15,000円+税 ISBN 978-4-653-04113-9)

矢島正浩著

『上方・大阪語における条件表現の史的展開』

本書は、近世期以降の上方・大阪語における条件表現について、その歴史を記述し、表現法の原理がどのように移り変わってきたのかを検討するものである。課題として、従属節を構文史研究の観点から研究すること、上方・大阪語を研究すること、語彙化や文法化の観点から捉えられる面を整理することをすえ、文献中の使用例に実際の使い方についての情報を求め、時代とともに推移する全体像をとらえつつ、近世以降の条件表現の使用原理は古代語とどのように相違しているのか、どういった事情があって現代大阪語へと続く条件表現の方法を選択するにいたったのかについて、説明する。

なお、本書の内容は博士論文（東北大学大学院文学研究科、2011年度）に基づく。

「Ⅰ はじめに」は「序章 本書が目指すこと」,「第1章 条件表現研究史」。「Ⅱ 条件表現の変化を促したものは「第2章 仮定的条件文に起きた変化」,「第3章 事実的条件文に起きた変化」,「第4章 原因理由文に起きた変化」。「Ⅲ 近世期以降の変化」は「第5章 タラの拡大——ナラ領域への進出をめぐる——」,「第6章 打消条件句の推移とその特殊性」,「第7章 原因理由文の推移とその意味」。「Ⅳ 接続詞的用法の発達」は「第8章 上方・大阪語における接続詞的用法ソレナラ類の推移」,「第9章 後期江戸語における接続詞的用法ソレデハの発達」,「第10章 上方・大阪語／江戸・東京語におけるソレダカラ類の発達」。「Ⅴ 当為的表現の推移」は「第11章 上方・大阪語

における二重否定形式当為表現の推移」,「第12章 上方・大阪語における「評価的複合形式」の推移」,「第13章 上方・大阪語／江戸・東京語における当為表現の推移」。「VI 言語資料と条件表現」は「第14章 言語資料として見た近松世話淨瑠璃」,「第15章 落語録音資料と速記本——五代目笑福亭松鶴の条件表現の用法から——」,「第16章 原因理由文の用法に見る五代目笑福亭松鶴落語」。「VII おわりに」は「終章 条件表現史研究から日本語史研究へ」。

(2013年2月28日発行 笠間書院刊 A5判横組み 496頁 4,200円+税 ISBN 978-4-305-70685-0)

福島直恭著

『幻想の敬語論——進歩史観的敬語史に関する批判的研究——』

本書は、「日本語の敬語とはいかなるものなのか」,「言語の歴史的研究とはいかなるものなのか」という間に、筆者の現時点での考え方を提示することを目的としている。前者の問に対しては、「敬語に対する人間の認識に関する考察を通して何かを主張している研究書」という立場から解答を探る。後者の問に対しては、「言語は発達している、言語は進化している」という共通認識に対して、疑問を投げかける。「変化」と「発達・進歩」は異なるという立場から、言語の歴史的研究と社会的な意義付けに一石を投じる。

本書は、2012年度学習院女子大学研究成果刊行助成を受けている。

「本書を読んでくださる方へ」,「序章 本書の目標と構成」,「第1章 現代日本語の敬語」,「第2章 敬語の歴史的研究に関する問題——進歩史観的敬語論——」,「第3章 自敬表現と絶対敬語——絶対敬語を支える事象の検証1——」,「第4章 身内尊敬表現と絶対敬語——絶対敬語を支える事象の検証2——」,「第5章 言語の歴史的研究のあり方——進歩史観的敬語論に対する批判を通して——」,「終章 進歩史観的歴史記述と社会」,「おわりに」。

(2013年2月28日発行 笠間書院刊 四六判縦組み 240頁 2,200円+税 ISBN 978-4-305-70686-7)

佐藤高司著

『新方言の動態30年の研究——群馬県方言の社会言語学的研究——』

本書は、1980年から2011年までの30年間に3回行った群馬県の高校生とその保護者を対象にした経年アンケート調査から得たデータを用いて、現代の群馬県における若年層の方言動態を把握し、社会言語学的視点から群馬県方言の若年層における変容を明らかにすることを目的とする。言語の使用面に着目し、多人数調査とそれに伴う大量のデータを扱うことによって、言語使用の変化の要因を言語内外から考察し、現代日本語方言の変容を現代の群馬県方言から明らかにしようとするものである。

なお、本書の内容は博士論文（東北大学大学院文学研究科、2011年度）を加筆修正したもので、ひつじ研究叢書言語編第105巻として発刊された。

「I 理論編」は「第1章 本研究の目的と方法」,「第2章 新方言の理論と本研究」,

「第3章 群馬県方言及び新方言の研究史」,「第4章 本研究における経年調査の概要」。「Ⅱ 群馬県における30年間の新方言の動態」は「第1章 東京型新方言と地方型新方言の30年間の動態」,「第2章 東京型新方言と地方型新方言の接触」,「第3章 東京型新方言の普及」。「Ⅲ 群馬県における30年間のベ-の動態」は「第1章 意志・勧誘のベ-の動態」,「第2章 推量のベ-の動態」,「第3章 ベ-の新しい変化」。「Ⅳ 群馬県若年層における方言使用と属性」は「第1章 方言使用における男女差」,「第2章 方言使用意識の変容」,「第3章 ラ抜きことばの変容」,「第4章 若年層の方言使用と「学校方言」」。末尾に「まとめと今後の展開」にあたる「新方言研究と国語教育」。(2013年2月14日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 272頁 8,600円+税 ISBN 978-4-89476-627-3)

沼本克明著

『歴史の彼方に隠された濁点の源流を探る——附・半濁点の源流——』

梵語の呪文である陀羅尼を正確に読誦するため日本人が試行錯誤した軌跡を辿り、清濁書き分けの源を明らかにする書。訓点資料を分析対象として、日本語の表記法の展開において梵語及び悉曇学の影響が極めて大きかったことを明らかにする。梵語を音読する場で発生した清濁の書き分けは、訓点資料で漢字音へ、やがて和訓表記にも流用され、濁点として定着することになる。附章として、半濁点の成立にも触れる。

「第1章 日本語と外国語の接触」,「第2章 平安密教の展開」,「第3章 日本語における清濁の書き分け」,「第4章 濁声点から濁点「゛」へ」,「附章 半濁点はどのようにして出来たか」。「結語」。

(2013年3月12日発行 汲古書院刊 B6判縦組み 292頁 3,000円+税 ISBN 978-4-7629-3611-1)

木村秀次著

『近代文明と漢語』

近代漢語成立の土壌、形成と受容の仕方、定着の過程、意味の推移、歴史的な意義や問題点について考察する書。

欧米諸国の近代文明の摂取とさらなる創造のために、漢語が果たした功績は広く大きい。これらの漢語が、いつ、いかにして成立し、いかなる位置を占め、いかなる役割を果たしたのか、用例を基に生きたことばとして、できるだけ総合的にとらえることを主眼とする。

「はしがき——本書の目的と各章の概略——」,「第1章 『論語』の漢語——近・現代語との関わりなど——」,「第2章 蘭学資料の漢語——自然科学用語と比喩的転用——」,「第3章 幕末・明治初期の漢語——学術用語など一斑——」,「第4章 『西洋聞見録』の漢語——創出語と借用語——」,「第5章 『西国立志編』の漢語——近世中国語の活用——」。

(2013年3月25日発行 おうふう刊 A5判縦組み 470頁 15,000円+税 ISBN 978-4-273-03700-0)

江田すみれ著

『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト
——異なるジャンルのテキストにおける使用状況とその用法——』

本書は、日本語教育の現場に生かすことを念頭に、「ている」「ていた」「ていない」についての調査・分析を行った書である。アスペクトのテキストの中での機能という考え方をふまえ、学習者がすぐに使うであろう会話と、大学生が読むであろう新書のテキストを使って、その中での「ている」「ていた」「ていない」の使われ方を検討している。

日本女子大学叢書 14 として発行された。

「第 1 章 研究の概要」, 「第 2 章 テキストの種類の違いとテンス」, 「第 3 章 効力持続について」, 「第 4 章 「ている」の用法」, 「第 5 章 「ていた」の用法」, 「第 6 章 「ていない」の用法」, 「第 7 章 まとめ」。

(2013 年 3 月 25 日発行 くろしお出版刊 A5 判横組み 302 頁 3,600 円+税 ISBN 978-4-87424-581-1)

田村早苗著

『認識視点と因果——日本語理由表現と時制の研究——』

本書は、現代日本語の理由を表す表現カラ・ノデを中心として、そこに現れる時制形式の性質について、主に意味論・語用論の側面から分析を行う書である。動詞基本形の分布と時間関係の解釈について、動詞基本形の意味論と時制形式の解釈の基準時を、知識の持ち主の観点から定めることによって説明を与える。

なお本書の内容は、博士論文（京都大学大学院文学研究科、2012 年度）に基づき、京都大学の「若手研究者に係る出版助成事業」による助成を受けて出版された。

「第 1 章 序論」, 「第 2 章 視点付き命題と理由文」, 「第 3 章 時制と視点の転換」, 「第 4 章 観察の因果構文について」, 「第 5 章 非難の因果構文について」, 「第 6 章 結論」。

(2013 年 3 月 27 日発行 くろしお出版刊 A5 判横組み 168 頁 2,400 円+税 ISBN 978-4-87424-580-4)

加藤重広著

『日本語統語特性論』

日本語の文法的特徴を一般言語学的な観点から考察した論文集。2005 年から 2011 年までに発表された筆者の文法論に関わる論文をもとに再構成されている。

受動構文を昇降格の点で対称と非対称に分けて整理記述すること、二重ヲ格が形態論的だけでなく意味的に制約されること、述部複合に弱境界と強境界が設定できることなどを明らかにしている。

北海道大学大学院文学研究科研究叢書 22 として発行された。

「第 1 章 日本語の品詞体系の通言語学的課題」, 「第 2 章 日本語における昇格と降格」,

「第3章 日本語の受動構文」, 「第4章 日本語における文法化と節減少」, 「第5章 日本語の述部構造と境界性」, 「第6章 二重ヲ格制約論」, 「第7章 対象格と場所格の連続性」, 「第8章 基幹格としての「が」の特性」, 「第9章 日本語形容詞の通言語学的考察」。
(2013年3月29日発行 北海道大学出版会刊 A5判横組み 316頁 6,000円+税 ISBN 978-4-8329-6778-6)

蒲谷宏著

『待遇コミュニケーション論』

本書は、「待遇コミュニケーション」という捉え方を前面に出して、敬語や敬語表現や敬語コミュニケーションの本質を明らかにし、敬語表現や敬語コミュニケーションを超えた表現やコミュニケーションの仕組みを解き明かす。

他人とコミュニケーションをとろうとするとき、どんな場面——私と相手の関係と、話題の人物との関係、その場の状況——で、どのようなことに注意して表現するのか。敬語表現などを中心に、実際に使用される表現を分析しつつ、コミュニケーションの仕組みについて明らかにしていく書。

「第1章 本研究の目的と意義」, 「第2章 考察のための理論的枠組み」, 「第3章 待遇コミュニケーションにおける敬語」, 「第4章 待遇コミュニケーションとしての敬語コミュニケーション」, 「第5章 待遇コミュニケーションの諸相」, 「第6章 まとめと今後の課題」。

(2013年4月20日発行 大修館書店刊 A5判横組み 352頁 2,800円+税 ISBN 978-4-469-22227-2)

今野真二著

『正書法のない日本語』

現代は、唯一表記への志向が強く、「標準的表記」が確立しつつある。しかし、その傾向はこの百年足らずの間のものである。日本への漢字伝来以来、多様な日本語表記があったことを、歴史的に観察する書。

全十冊からなる岩波シリーズ「そうだったんだ!日本語」の一。

「序章 日本語には正書法がない」, 「第一章 漢字で日本語を書く」, 「第二章 仮名で日本語を書く」, 「第三章 仮名と漢字とで日本語を書く」, 「第四章 明治期の日本語表記の多様性」, 「第五章 現代日本語の表記」。

(2013年4月24日発行 岩波書店刊 B6判縦組み 208頁 1,600円+税 ISBN 978-4-00-028621-3)

前々々号 (第9巻1号) 訂正 52ページ

誤: 齊木美知代・鷺尾龍一著『日本文法の系譜学——国語学史と言語学史の接点——』

正: 齊木美知世・鷺尾龍一著『日本文法の系譜学——国語学史と言語学史の接点——』